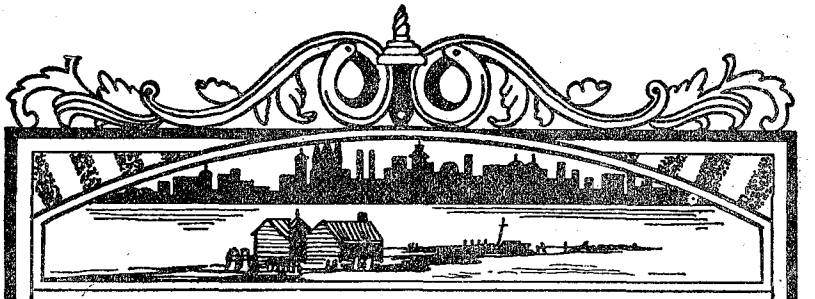
道路の改良

昭和七年

四月一日

第十四卷

第四號



卷頭言

昨年柳條溝の鐵道破壞に端を發した滿洲事件は上海の夫れに波及したが、漸く停戰協定にまで漕ぎ附け、政治的地位はまだ安定しないにしても兎も角滿洲新國家の成立を見るに至つたのは東洋平和の爲に寔に慶賀すべきである。事變に對する責任の所屬は、國際間に於て公平な判斷に依つて解決さるゝであろうが、干戈が收まつた今日に於ては、我が帝國が條約に依つて得た滿洲に於ける特殊權益を維持し、我國民生の爲に之を利用せなければ日清、日露の兩役や今回の事變に對して拂つた犧牲を償ふことが出來得ない。

新國家は、此處大乘相應の地に史上未だ見ざる理想鄕を創建すべく、全努力を傾くるは、卽ち興亞の大濤となりて人種的偏見を是正し中外に悖らざる世界正義の確立を目標とす、と宣言してゐる。若し之が其の言の如くむば、東洋に極樂土を見る譯であつて、我が權益維持の爲に新國家の方針を助勢せなければならぬ。其の方途は多々あるが、最も急を要するものは陸上交通機關の整備である。既に鐵道省に於ては滿蒙に於ける鐵道の計畫に資する爲に官吏を派遣したと傳えられ、國民の滿洲進出に異常の强味を與えた。鐵道の計畫固より結構ではあるが、自動車の發達著しい現在に於ては道路の建設は鐵道より以上の急務と言はねばならぬ、殊に新都市の建設を策するに於て然りである。今宜敷合理的な道路網を設定して將來の發展に備ふることは名實相伴ふ極樂土を建設する所以であつて、我國の之に參畫する當然の責務を有する。政府は此點に着眼して滿洲道路政策の樹立を助勢するの方途を講ぜむことを希望して已まない。